

『釈摩訶衍論』における「三十三法門」の意義 ——十種論との関わりを中心に——

関 悠 倫

一 はじめに

『釈摩訶衍論』（以下『釈論』）は『大乘起信論』（以下『起信論』）の注釈書である。三十三法門とは、『釈論』が立義分を解釈したもので、特に、その内の不二摩訶衍法を重要な思想と位置付ける。このような内容は、『釈論』以外の注釈書には見出せず、それに類する思想や説示も認められない。先行研究では、

三十三法門が『釈論』の特性であるとする指摘、あるいは『釈論』自体を『大乘起信論義記』に対する研究史の一環として取り扱う傾向がある。⁽¹⁾しかしながら、三十三法門が説示された思想背景まで踏み込み、その意義を明らかにしたものはないようである。筆者は、本稿において、『釈論』が三十三法門を説いた背景に特有の馬鳴像理解があつたのではと予想している。

すなわち『釈論』には非常に独創的な馬鳴觀が見られ、その馬鳴に対する見方がなければ三十三法門は説示されることはないかつたと考える。筆者は三十三法門が特性とのみ評価されるも

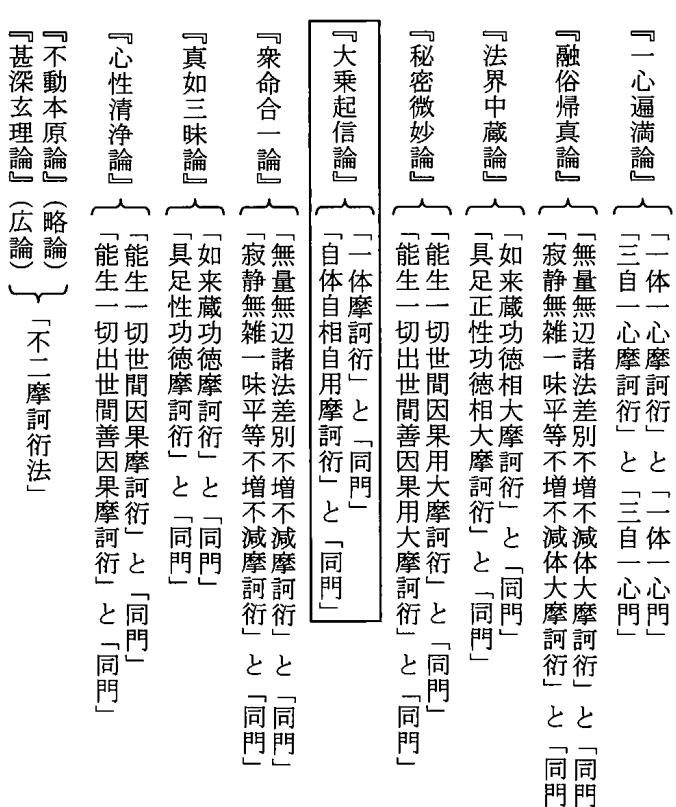
のではないことを付加したい。そこで本稿では馬鳴像に対する独特な理解に基づいて説く、馬鳴作とされる十種の論に注目しつつ、三十三法門の意義を再検討したい。

二 『釈論』における馬鳴理解と十種論

『起信論』（馬鳴造・真諦訳）は現在でも成立地や年代等の問題が定まっていない。この問題については、柏木弘雄により多方面からの緻密な検討がなされている。⁽²⁾また、石吉岩は地論宗との関わりを中心まとめている。⁽³⁾これら先行研究において、『起信論』が中国に流布したとされる時期は、六世紀後半とされている。『釈論』については石井公成や遠藤純一郎が八世紀初から後半頃とする。本稿では成立には言及しないが、『釈論』が注釈書である以上、『起信論』流布以後より八世紀後半の間に成立したとしか現段階では言えない。だが、『釈論』には龍樹（Nāgārjuna）造とするインド撰述・筏提摩多訳のみが伝わっている。⁽⁴⁾『釈論』は馬鳴について六人からなる説を六

種の經典に基づき説いている。⁽⁶⁾ それは①仏成道第十七日目の馬鳴（『勝頂王契經』の説）、②仏入涅槃の日の馬鳴（『大乗本法契經』の説）、③仏滅後百年後の馬鳴（『摩尼清淨契經』の説）、④仏滅後三百年後の馬鳴（『變化功德契經』の説）、⑤仏滅後六百年後の馬鳴（『摩訶摩耶契經』の説）、⑥仏滅後八百年後の馬鳴（『常徳三昧契經』の説）となる。『釈論』は以上の馬鳴たちが本来「大光明仏」であり、時代を隔て化生し、不動地である第八地の菩薩として、仏の成道・入涅槃・仏滅後において、都合六回登場したとする。馬鳴の出現についても「機に随つて応ずる」とし、衆生を解脱・済度させるための教えとして十種の論を説いたとする。その十論というのが『起信論』を含む、『一心遍滿論』・『融俗帰真論』・『法界中藏論』・『秘密微妙論』・『衆命合一論』・『真如三昧論』・『心性清淨論』・『不動本原論』・『甚深玄理論』⁽⁸⁾ をいう。『起信論』以外の論は実在を確認できない架空論書とされている。要するに『釈論』は時代を経て登場した六人の馬鳴が十論のいずれかを説いたという独特の説示をしている。⁽⁹⁾ 三十三法門と十論の論の関係を概説すると以下のようになる。

三十三法門とは三十二法門と不二摩訶衍法を合わせた三十三種の法門をいい、不二摩訶衍法を重要な思想と位置づける。これは三十二法門に対比して「因縁」・「機根」・「教説」を超越した法で、三十二法門を所得する根源的な摩訶衍と位



※『融俗帰真論』以降の門の名前は文字数の都合略している。

『釈摩訶衍論』における「三十三法門」の意義（関）

られ、注釈書の体裁として違和感を覚える。筆者はこの点をどのように読み取るのかが重要な視点だと考える。それは『釈論』が三十三法門を説示した背景に、馬鳴の説く十論が事前にあり、その論の境界・本質を説いたものが各一論に対応しているのである。そのように見ると、『釈論』は三十三法門に

まつわる構想を馬鳴より直に受け、注釈書として造論する中で三十三法門を説示したと主張していることになる。そのように理解すると、三十三法門が『釈論』作者とされる龍樹の創作ではないという見方が可能となる。『釈論』の説示には以上的内容を裏付けるように、立義分解釈の部分において馬鳴の名を登場させている。それは「馬鳴菩薩正しく彼の文を撰す」⁽¹¹⁾や、「馬鳴菩薩の本趣意樂」⁽¹²⁾等である。つまり『釈論』は三十三法門というテーマを基盤として『起信論』を注釈していることになる。一方で馬鳴の深旨を龍樹が受け三十三法門を説くことができた理由は何かという点は鮮明ではない。なぜ『釈論』は独特な馬鳴像を開拓したのであろうか。その点が気になる。

三 序にみる馬鳴と龍樹

『釈論』は「廻向頌」解釈の際、龍樹の立場を「歡喜大士」と説く。⁽¹³⁾これは龍樹を初地である歡喜地の菩薩とするものである。この初地の龍樹と八地の馬鳴の関係について『釈論』

の序を見ると、密接さを匂わす興味深い記事がある。

朕、方に解（さと）りぬ、化因を七覺の宝林に茂らせ、蓮種を八徳の珠池に植えたりということを。（中略）馬鳴聖者の光明の徳、時に具さに顯われ、龍樹大士の妙雲の瑞、方に円かに啓けたるを以つてなり。洋々たり、簫々たり。

この序の成立は「姚興皇帝製」⁽¹⁵⁾と記されているが、現在では仮托されたものと考えられている。序の内容を見ると、「化因」とは、馬鳴と龍樹が、この世に化現した因縁を「七覺支」を得た輪香長者とその「珠池」という妻を父母となして出生したとするものである。後半には「馬鳴聖者の光明の徳」と「龍樹大士の妙雲の端」⁽¹⁷⁾とあり、馬鳴が大光明仏とする説や龍樹が歡喜大士とする説を援用したものである。以上を纏めると、なぜ龍樹が馬鳴から三十三法門の論旨を受けることができたのかは、二人が兄弟であるとする関係を背景に置いているからこそ成し得たのである。まるで二人が仏から弟子へと法が相承していく過程を暗示しているようにも見受けられる。

四 まとめ

先行研究において『釈論』を特徴的な注釈書と指摘することは筆者も同感である。だが、『釈論』が三十三法門を説いた背景には、『釈論』にとつて『起信論』以外の九種の論が架空であるか否かはそれほど問題ではなかつた。それよりも十論

が肉親である馬鳴の所説であることを論じつつ、六馬鳴の本旨を直に受けたのは兄弟である龍樹なのだと主張する点に注目すべきである。三十三法門が創設された意義の主軸にあるのは馬鳴の役割なのである。⁽¹⁸⁾

- 1 吉津宜英「二〇一四」。
- 2 柏木弘雄「一九九一」。
- 3 石吉岩「二〇一〇」七一二六七頁。
- 4 石井公成「一九九六」、遠藤純一郎「一九九五」八一頁。
- 5 「釈論」大正三三、五九二頁上―中。序には弘始三年（四〇一）に『釈論』が漢訳されたとある。
- 6 「釈論」大正三三、五九四頁中―下。『釈論』の内にはこのような順番で説かれていない。成道から仏滅後八百年後の時間軸を勘案してこのようにした。
- 7 「釈論」大正三三、五九四頁中。
- 8 「釈論」大正三三、五九一頁下。
- 9 「釈摩訶衍論記」。本書の著者聖法は六馬鳴と十種論の成立について説いている（正統藏經七二、七三三二頁上）。
- 10 「釈論」大正三三、六〇一頁下。
- 11 「釈論」大正三三、六〇〇頁中。
- 12 「釈論」大正三三、六〇一頁中。
- 13 「釈論」大正三三、六六八頁中。
- 14 「釈論」大正三三、五九二頁上。
- 15 「釈論」大正三三、五九一頁下。
- 16 中村本然「一九八六」。

『釈摩訶衍論』における「三十三法門」の意義（関）

- 17 柏木弘雄「一九九九」を参考とした。
 - 18 本多隆仁「二〇一四」一三頁。
- 〔一次資料〕
『釈摩訶衍論』 大正三三所収

〔参考文献〕

森田竜僊『釈摩訶衍論之研究』（山城屋文政堂、一九六九）

柏木弘雄『大乗起信論の研究』（春秋社、一九九一）

石井公成『華嚴思想の研究』（春秋社、一九九六）

柏木弘雄『『釈摩訶衍論』を読む』（真言勸学之会、一九九九）

石吉岩『『大乗起信論』の地論宗撰述説に対する意見』（金剛大学校

佛教文化研究所編『地論思想の形成と変容』（国書刊行会、

二〇一〇、二四七一二六七頁）

吉津宜英『大乗起信論新釈』（大蔵出版、二〇一四）

中村本然『釈摩訶衍論の成立問題について』（『印仏研』三四一二、

一九八六、六六一七一頁）

遠藤純一郎「三十三法門について」（『智山学報』四四、

一九九五、八五一〇二頁）

本多隆仁「『釈摩訶衍論』における立義分解釈の問題点」（『密教学研

究』四六、二〇一四、一一一四頁）

（キーワード） 三十三法門、十種論、馬鳴、龍樹

（大正大学副手）